

2人の人気映画監督も注目

## 団地、

# その懐かしくて新しい魅力とは

今年の5月、6月にかけて、  
団地を舞台にした2本の映画が公開になった。  
どちらも、脚本、監督ともに50代の人気監督。  
いまなぜ、団地なのか。そして、様変わりする現代の団地とは？  
二人の監督のインタビューを通して、  
団地をとりまく、いまだき事情を探った。文 阿部民子 Tamiko Abe



阪本順治  
監督

### 団地の歴史を借りて 人の営みを描きたい

4月30日付の日経新聞に「50代監督、団地を撮る」という記事が掲載された。紹介されたのは、6月公開の阪本順治監督による『団地』と、5月公開の是枝裕和監督による『海よりもまだ深く』。期せずして、2か月連続で当代人気監督による団地を舞台にした映画が公開になるとあって、団地に再スポットが当たった感がある。その背景や狙いについて、お2人の監督に話を伺った。

「今回の映画の舞台は、いまの高層化してエレベーターのある団地ではなく、僕が小学生から中学生くらいの頃に建てられたよう

な、エレベーターのない5階建ての団地です。その頃は大阪万博もあつたし、ニュータウンという名で次々と新しい団地が建てられていました。当時の団地は、新しい住まいの形とか明るい未来、核家族化の象徴でしたね」と語るのは、映画監督の阪本順治氏。

1958年生まれの大阪府出身。赤井英和主演の『どついたるねん』で監督デビュー。藤山直美を主演に迎えた『顔』（00）では、日本アカデミー賞最優秀監督賞、毎日映画コンクール日本映画大賞・監督賞などを受賞している。

当時は最先端だった団地も、半世紀を過ぎて、大きく様変わりしている。建て替えや間取りのリノベーションが進む一方、当時のままの団地では、高齢者が増えるなどの状況も報じられている。

阪本監督は、逆に、そんな時間の流れを感じさせる風景にカメラを向けたくなったのだと言う。

「団地を擬人化すれば、彼らが生まれ、彼らがずっと変わらなかつたことで、そこには一種独特な『匂い』が漂っています。団地のひと

部屋ひと部屋がいろんな人生、いろんな家族を受け入れてきた。その歴史みたいなものを借りて、人の生き死について語れないかと思つたのが、団地を映画の舞台に選んだ大きな理由です」

物語の舞台は、大阪近郊の団地。一人息子を事故で失つたのをきっかけに、老舗漢方薬局をたたんだ山下ヒナ子（藤山直美）と、清治（岸部一徳）夫婦が引越してくる。自治会長の行徳正三（石橋蓮司）と、君子（大楠道代）夫婦をはじめとする住民は、新参者に興味津々だった。そんなある日、些細な事でへそを曲げた清治は「僕は死んだことにしてくれ」と床下に隠れてしまう。突然姿を見せなくなった清治に、住民たちは失踪か、と大騒ぎ。さらに、どこか言動のおかしい青年（斎藤工）が山道家を訪れ、物語は意外な結末を迎える。劇中には「団地でオモロイなあ……噂のコインロッカーや」とか「ありえないことがありえるのが、団地」など、団地にまつわる印象的なセリフもちりばめられている。

団地、その懐かしくて新しい魅力とは



## 『海よりもまだ深く』

原案・監督・脚本・編集：是枝裕和  
©2016 フジテレビジョン バンダイビジュアル AOI Pro. ギャガ  
配給：ギャガ  
丸の内ピカデリー、新宿ピカデリー他にて公開中

日本にはじめて公団住宅「団地」が誕生してから60年。両監督が映画の舞台とした「昭和」の香りが残る団地に対し、「今」の団地は、より暮らしやすく快適な住まいへと、大きく変貌を遂げつつある。



柏市が市の医師会・歯科医師会・薬剤師会と共同で在宅医療・介護を推進する拠点として整備された「柏地域医療連携センター」。



サ高住は1DK・2タイプと1LDK・1タイプの計3タイプ。バルコニーから日差しがたっぷり降り注いで快適だ。

より暮らしやすく、  
どの世代にも開かれた  
住まい、そしてまちへ



是枝裕和  
監督

高齢化が進んでいる。それに伴い、高齢者のための安全で快適な住まいや、健康維持に役立つ環境づくりへの取り組みが始まっている。

研究機構、UR都市機構が共同してプロジェクトを実施。医療・介護が連携した在宅医療推進の取り組みや、高齢者が活躍できる「生きがい就業」などが進行中だ。団地の中心部にはサービス付き高齢者向け住宅を建設し、地域包括支援センターや子育て支援施設、診療所、薬局などを集約。柏市と市の医師会・歯科医師会・薬剤師会で運営する「柏地域医療連携センター」を設けるなど、団地内だけでなく、近隣地域の高齢者の生活を支える設備も整っている。ほかにも、東京都板橋区の高島平団地では、一般住戸に交えてサービス付き高齢者向け住宅を設置するな

団地、その懐かしくて新しい魅力とは



## 『団地』

脚本・監督：阪本順治  
©2016「団地」製作委員会  
配給：キノフィルムズ  
有楽町スバル座、新宿シネマカリテ他にて公開中



撮影中は、開けっ放しの窓から読経やラジオ、テレビの音が聞こえてきたり、部屋の中が丸見えだったりという、団地ならではの光景に出逢ったという。そのなかで、団地は、課題を抱えながら、個々が守られつつ、どこか同じ場所で暮らしている安心感やつながりがある、と感じたとか。

## 人工的でありながら 芳醇な情景が広がる場所

「主人公のヒナ子夫婦は、息子を失ったことで住まいを変えることになりました。もう一切人と関わりたくないと思えば、プライベートが確保されるオートロックのマンションを選ぶでしょうが、閉じこもって悲しみを抱えるにはしんどすぎる。昭和の団地には、適度なさみさと適度なコミュニケーションがあつて、失った悲しみを閉じるよりも安らげるんじゃないか。団地を舞台にしたのは、そういう理由も大きかったですね。いわば、下町です」

息子を始め、母親や別れた元妻も、「こんなはずじゃなかった」という思いを抱きながら、夢見た未来とは違ってしまった今を生きている。団地も同様に、建設された当時とは、いろんな意味で違う着地点にたどりつきつつある。そうした登場人物と団地の人生を重ねられたら面白いと思っただけです」

## 団地、その懐かしくて新しい魅力とは



MUJI(無印良品)とUR都市機構がコラボしたリノベーションプロジェクト。その部屋はシンプルで機能的。若い世代に人気がある。

ど、各地で取り組みが進行中だ。ふたつ目の大きな流れが、ミクスティックユニティ(さまざまな世代が共生したコミュニティ)づくりへの取り組みだ。豊かなコミュニティとは、子供や若者、子育て世代、中高年、高齢者……それぞれの世代がバランスよくいてこそ。そのために、若い世代に魅力的なプロジェクトが進められている。そのひとつの試みが、MUJI(無印良品)やイケアなど、民間企業とコラボしたリノベーションだ。企業それぞれの個性を生かした内装のほか、洋風の麻畳などの新素材も共同開発。緑が豊かで家賃が安く、日当たりや風通しがいい、

という団地のよさを生かしながら、おしゃれで快適にリノベーションされた住まいは、新しい住まい方を提案している。

住居学などを専攻する女子大生によるリノベーションコンペもユニークな試みだ。日本女子大学や京都女子大学の学生が、団地の部屋のリノベーション案を作成。優秀作品は実際に施工して、入居者を募集する。女子大生ならではの住みやすさへのアイデアやおしゃれな工夫が盛り込まれた部屋は若い感性による豊かな発想力が人気を呼んでいる。

親世代と子世代、双方へのメリットが大きなのが「近居促進制度」だ。「近居」とは、親子の各世帯が日常的に往来のできる距離に住むことで、育児や介護を助け合いながら、核家族同士をゆるやかに結びつける新しい住み方。UR都市機構では、同じUR団地や半径2キロ以内の別の団地に2世帯が近居する場合、新しくUR賃貸住宅に入居する世帯の家賃を5年間5パーセント割り引く「近居割」を実施。「それぞれのプライバシー



日本女子大学 光が丘リフォームコンペで最優秀賞を受賞した部屋で、学生さんたちがモデル役に。

ト空間が確保できる」「困ったときには互いに助け合える」と、利用者が増加中だ。

では、これからの団地はどこへ向かっていくのだろうか。そのひとつの指針となりそうなのが、昨年からのスタートした「団地の未来プロジェクト」だ。団地の価値を見つめ直し、新しい時代の輝きを与えて、より良い住まい方と地域のあり方を創造するのが狙い。モデルエリアに選ばれたのは横浜市の洋光台団地。ディレクターアーキ



横浜・洋光台団地で隅研吾氏と佐藤可士和氏。

テクトは新国立競技場のデザインを手掛けることでも注目の世界的建築家、隈研吾氏、プロジェクトディレクターは日本を代表するクリエイターである佐藤可士和氏と充実の顔ぶれ。かつて魅力的な文化を発信した団地の未来像を描き、新しい住まい方の具現化として、注目を集めている。

いつの時代も人々の暮らしに寄り添い、豊かなコミュニティの場であり続けている団地。これまでも、そしてこれからも、ますます目が離せない住まい、そして暮らしの形となりそう。

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます